言必先生の中国便り

愛国とポイ捨て

十月の初め、友人に誘われ、三浦半島の最先端に行った時のことである。秋空は青く、暑くも寒くもない気温で、本当に観光するには最も良い日である。グループの中の二人は、中国からの女性である。彼女たちは、綺麗な空気を吸い、透明な海水を見て、興奮した様子だった。直ぐに写真を撮って、中国の友人にメールで送った。数分間の後、中国からの返信メールも届き、羨ましい心情と近いうちに日本に観光したいという内容であった。バーベキューをしながら私は二人と歓談した。二人は、中国の「海上名珠」と称される観光地の海南島の海と海岸は、ここは比べものにならない、ゴミだらけの島である、と話してくれた。

楽しい集いの後、東京に戻る電車でipadのネットニュースを見た。十月一日は、中国の国慶節で、朝の国旗の掲揚式はとても人気である。今年の儀式で、約11万人の人が、北京の天安門広場に集まった。儀式の後、群衆は去ったが、5トン以上のゴミが残った。これについて、中国の各媒体は大討論を起こした。元々、中国人のポイ捨ては、日常茶飯事である。普通の場合には話題にならないのに、なぜ今回の事は注目されたのか。

実は、国旗の掲揚式を見に行く人の大部分は、愛国者であった。そういう人間は、なぜ愛国の儀式に参加しながら、無神経に神聖な場所にゴミを捨てるのか。これが、各媒体の大討論の趣旨だと思う。

中国の道徳教育の中心には愛国があり、他は全て些細な事である。筆者の記憶では、小学校の教科書の中に「胸懐祖国、放眼世界」（心に祖国を思い、目を世界に向ける）という内容がある。一方、礼儀、秩序、衛生、謙虚、譲り合い等の道徳の基本は、先生から教わらなかった。

改革・開放以後、ある程度基本道徳の内容は教科書に盛りこまれた。しかし、愛国教育と比べると比重は低い。また、今日の中国社会は、中華民族の歴史上で最も道徳が低下している時代と言われ、学生は社会に出たらいわゆる「郷に入っては郷に従う」で、道徳の理念も早々に捨ててしまう。更に、愛国は他の道徳の上に君臨しているから、愛国の名義で、ポイ捨て、破壊、暴力をしても構わないということは、相当数の中国の愛国者の考えである。

今回の愛国大討論で、大部分の媒体と討論参加者は愛国者のポイ捨て行為に批判的な態度をとった。「東方早報」の論評で、国歌の斉唱と国旗の掲揚は、無責任な愛国者にとって単純な興奮の快感をもたらすかもしれないが、彼らは本当の愛国者ではなく、「愛国虫」であるに違いないと言い切った。